

成長を自覚し、主体的に学ぶ児童を育成する授業 ～ルーブリックの共有による指導と評価の一体化の研究～

新潟市立関屋小学校
校長 川又 健司

1 はじめに

現行学習指導要領では、これまでの我が国の学校教育の実績や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することが求められている。また、学習指導要領の実施に先立って中教審から示された「児童生徒の学習評価の在り方（報告）」では、資質・能力を身に付けさせる過程において、児童生徒に自らの学習の見通しをもたせることなどをねらいに、学習評価の方針等を児童生徒と共有することの必要性が述べられている。

児童が必要な資質・能力を身に付けていくためには、児童自ら目的意識をもち、見通しをもって学習に取り組むことが不可欠である。そして、自らの学習過程を振り返って自己評価し、次の学習に生かすような学習評価の改善が求められているのである。

2 主題設定の理由

当校では、学習指導要領のスタートに合わせ、「指導と評価の一体化」に取り組んだ。しかし、評価が指導に十分生かされているとは言えない状況があった。また、児童が自ら学習過程を振り返り、評価・改善を行おうとする姿勢こそが大切であるとの考えから、令和3年度より「教師と児童の学習評価の共有」をテーマに、標記研究主題に取り組んでいる。

当校では、学習評価の共有を具体的に進める手段として、ルーブリックを活用した学習評価に取り組むことにした。ルーブリックとは、学習到達度を示す評価規準を、資質・能力の観点ごとにレベル3～レベル1の判断基準で設定し、それを表形式にまとめたものである。

教師が単元で身に付けさせたい資質・能力に合わせたルーブリックを作成して児童と共有し、授

業終末の振り返りで、児童がそれを基に自己評価を行う。それにより、児童がめあてをもって主体的に学び、成長を自覚するとともに、さらに次の学習への意欲をもつことができると考えた。

3 1年次の取組から

当校では、研究開始時点でルーブリック評価について知識のある職員、活用した経験のある職員は、ごくわずかであった。そこで1年次は、まず参考文献を基にしながら、各自が取り組みやすい教科や単元で実践してみることにした。

主に重点を置いた点は、次の2点である。

- どのようにルーブリックを作るか
- 授業のどの場面で、どう提示するか

どのようにルーブリックを作るか

ルーブリックは、資質・能力の育成につながるものでなければならない。そこで、各授業のルーブリックを、次の手順で作成した。

- ① 単元で身に付けさせたい資質・能力（指導内容）を基に、**単元のルーブリック（3観点）**を作成する。
- ② 公開授業本時の評価の観点に合わせて、**本時のルーブリック**を作成する。
- ③ 作成したルーブリックを、必要に応じて児童に分かりやすい表現に直して、**提示用のルーブリック**を作成する。

なお、1年次は教師も児童も初めてルーブリック評価に取り組むことから、1時間に1つ（1観点）のルーブリックで実践を行うことにした。

〈実践事例1〉

2年国語「そうだんにのってください」

本単元は、「話すこと・聞くこと」の指導内容「お互いの話に関心をもち、相手の発言を受け

て話をつなぐこと。」を目指すものである。

○本時（5／8）のルーブリック（提示用）

レベル3	しつもんをしてから、アドバイスや自分の考えを話すことができた。
レベル2	しつもんをすることができた。または、友だちのしつもんを聞いて、アドバイスや自分の考えを話すことができた。
レベル1	しつもんやアドバイスはできなかったけれど、うなずきながら話を聞くことができた。

単にルーブリックを提示してこれを目標にせよと言っても、児童の本当のめあてにはなりにくい。そこで本時は、前時の学習でうまくいかなかったことや見付けた話合いの技について全体交流し、児童が取り入れたい質問の技をまず洗い出した。その上で、その技を取り入れたルーブリックを提示するという流れを作ったため、児童にとって受け入れやすい内容となった。

本單元ではこのように、前時の振り返りと結び付けながらルーブリックの内容を工夫して提示し、自己評価



につなげていった。その結果、児童は自分の話の仕方の足りない部分を意識して取り組み、さらに振り返りから次時のめあてを定めるといった学習の調整ができ、主体的に学習に取り組むことができた。

本単元の事後アンケートは以下のようにっており、ルーブリックが効果的に活用されたことがうかがえた。

- ・ルーブリックがあったので、めあてを決めやすかった。 (100%)
- ・ルーブリックを使って振り返りをしたので、次のめあてを決めたり、学習のやり方を考え直したりしやすかった。 (83%)
- ・ルーブリックがあったので、何ができればよいか分かってやる気が出た。 (77%)

また、本実践で得られた作り方の知見の1つとして、次のことが挙げられる。

・レベル1であっても、児童の意欲を大切にす

る意味から、肯定的な表現を取り入れる。

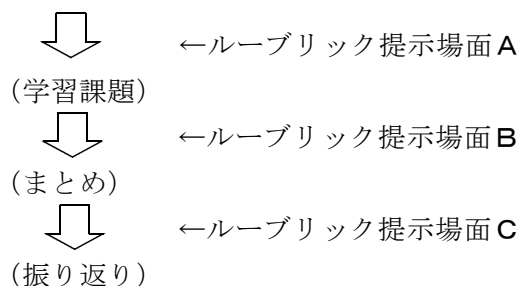
レベル3～レベル1は、評価規準としては評価A～Cに相当する。そのため参考文献においても、レベル1は「～できない」のような否定的な表現が使われていた。また、当校の実践においても、当初はそのような表現を用いていた。

しかし本実践では、授業者が「レベル1を選ばざるを得ない児童にも意欲をもたせたい」という思いから、レベル1も肯定的な表現で作成した。授業後の協議会では他の職員からもこれに賛同する意見が多く出され、その後学校全体で、「レベル1もできるだけ前向きな表現にしていく」ことを確認し合った。

授業のどの場面で、どう提示するか

当校では、授業の計画を立てる際、新潟市の進める「学習課題-まとめ-振り返り」を基本形としている。これは、ルーブリックを使用する授業でも変わらない。そのため、その枠組みのどの部分でルーブリックを提示するかを、授業研究を進めながら検討し合った。

提示する位置としては、下の3つが考えられる。



Aは学習課題を設定する前、Bは学習課題の設定後、そしてCはまとめの後である。課題解決型か技能習得型かなど、授業のねらいや性質によって、効果的な提示場面も変わってくる。1年次の8実践ではAでの実践が4つ、Cでの実践が4つ、Bでの実践は無かった。

Aでの実践は技能習得型の単元で、前時の振り返りからすでに本時のめあてがある程度はつきりとしている場合が多かった。前時の振り返りとつなげてルーブリックを提示し、その後「ではどうしたらよいだろう」と学習課題を設定していくスタイルである。

一方、Cでの実践は、学習課題に対するまとめが比較的早い段階で終わり、「ではみんなでやってみよう」「できるかな」という流れのものが多かった。そこでループリックを提示するスタイルである。

いずれにせよ、本時のねらいから考えてより有効な場面でループリックが生かされるよう、各授業者が適切な位置を考えて設定することが大切であると分かった。

〈実践事例2〉

6年体育「6年間の成果を発表しよう～マット編～」

本時は、場面Aでループリックを提示し、その後学習課題の設定につなげていった実践である。

○本時（3/8）のループリック（提示用）

レベル3	補助付きの倒立から、あごを引いて背中の方に倒れ、安全に倒立前転ができる。
レベル2	かべ倒立の姿勢から（補助あり）、あごを引いて背中の方に倒れ、安全に倒立前転ができる。
レベル1	かべ倒立（補助あり）から、倒立前転をしている。

本時では、前時の振り返りを基に、補助倒立前転ができるためのステップとして、上のループリックを提示した。その上で、「上手にできるようになるためには何に気を付けたらよいか」という課題意識を引き出し、学習課題の設定へとつなげていった。児童の意識の流れに沿った提示となり、ループリックも児童自身のめあてとなった。

児童は互いに補助をし合ったり、タブレット端末で撮影し合ったりすることを通して、うまく倒立前転するためのコツを話し合っていた。そして、約9割の児童が本時のねらい（レベル2以上）を達成することができた。

〈1年次の成果と課題〉

手探りの実践ではあったが、8つの授業実践を通して、次のような成果と課題が見付かった。

①成果

- ・ループリックが示されると、児童はゴールイメージを明確にもつことができ、意欲的に学習に取り組む。また、教師のゴールイメージも明確になり、評価がしやすい。
- ・単元または小単元を通したループリックを作

成すると、児童は自分がどのレベルにいるかが明確になり、次の活動のめあてをもちやすくなる。

- ・前時までの学習を振り返ったり、資料から考えたりしてループリックを児童と決めるようにすると、より主体的に学ぶようになる。

②課題

- ・本時のねらいに即して、複数観点でのループリックにも取り組む必要がある。
- ・教師と児童とで、ループリックの捉え方によれが出ないよう、その文言や取り扱い方をより工夫していく必要がある。

4 2年次の取組から

2年次は、前年度の課題を踏まえ、主に次の2点に重点を置いて取り組んでいる。

○1時間の授業の中で、複数の観点のループリックに取り組む

○ループリックによる児童の自己評価と教師の評価の差を縮める

〈実践事例3〉

3年算数「筆算のしかたを考えよう」

本時は、(3位数) × (1位数) の繰り上がりのある筆算について学習する時間である。児童は前時までに、(2位数) × (1位数) の繰り上がりのある筆算などを学んでいる。

○本時（6/9）のループリック（提示用）

【知識・技能】

レベル3	くり上がりに気を付けて、練習問題が全部できた。
レベル2	くり上がりに気を付けて、練習問題が半分以上できた。
レベル1	まちがえてしまったけれど、練習問題を筆算でといた。

【思考・判断・表現】

レベル3	キーワードを使ってマスターカードを書き、友達に説明できた。
レベル2	キーワードを使わなかったけれど、マスターカードを書き、友達に説明できた。
レベル1	友達の説明をしっかりと聞くことができた。

複数のループリックを提示することから、提示

や自己評価のための時間配分、提示のタイミングなどに配慮して実践を進めた。

ルーブリックによる児童の自己評価と教師の評価の差を縮める

〈実践事例3〉のルーブリックの内、【知識・技能】の評価は、授業の終わりの練習問題で判断するため、児童の自己評価と教師の評価に差は無かった。

一方、【思考・判断・表現】の児童の自己評価と教師の評価は、下のようになった。

	レベル3	レベル2	レベル1
児童	13人	6人	0人
教師	11人	6人	2人

自己評価と教師の評価が一致した児童は13名、一致しなかった児童は6名であった。また、一致しなかった6名の内、5名が自己評価の方が高かった。この5名は、教師から見ると「キーワードの使い方が不十分」「最後まで説明できていない」というものであるが、本人はできていると自己評価している。このことから、児童の自己評価と教師の評価の間にずれがあることが分かる。



ポイントと考えていた。

そこで、学習課題「3けたのかけ算にくり上がりがあるときは、どのように筆算したらよいのか」を設定した後（提示場面B）、まず児童に課題解決の見通しをもたせるため、(2位数)×(1位数)の繰り上がりのある筆算の学習を想起させ、ポイントを板書していった。その段階でルーブリックを提示することで、児童が板書された「位ごとに計算」「くり上がった数を書いておく」などをキーワードと認識してくれると考えていたのである。

しかし、結果を見る限り、共通理解が十分でなかったことがうかがえる。ルーブリックを提示し

た後「何ができるとレベル3になるのか」について、より明確に全体で確認し合うことが必要であることが分かった。

児童に結果をフィードバックする

本時のように、児童の自己評価と教師の評価の間にずれがあった場合、少なくともこの5名に教師の評価とその理由をしっかりと説明する必要があると考える。それが先述の「中教審報告」にある「結果のフィードバック」であり、次回以降の児童の自己評価の精度を高めることにつながると考えるからである。

この点については、今後さらにその方法をよく検討し、工夫しながら取り組んでいきたいと考えている。

5 終わりに

今日は、高さと言の比がわかっていて、高さと言のどちらかがわかっていればもう一方が求められるとわかりました。式だけでなく、どうしてそうなるのかを書けたのでよかったです。

(6年算数「比」の学習での振り返りから)

どの学年の授業においても、児童はルーブリックを基に自分の学習を自己評価し、上記のような振り返りを書いてきた。そして、上のレベルを目指して意欲的に取り組むとともに、多くの児童が授業のねらいを達成していった。

しかし、本当の意味で「学習評価の共有」を行うためには、その表現内容や取り扱いについてまだまだ課題があることも感じている。

- ・まず、児童に分かりやすく、誤解の生じないような文言でルーブリックの内容を作成する。
- ・その上で、提示した段階、自己評価をする段階などに、各レベルの違い、条件などを全体でしっかりと確認する。
- ・児童の自己評価と教師の評価にずれがあった場合は、なぜ教師の評価がそのようになったのかを、丁寧に説明する。

よりよい授業を求める営みにゴールはない。今後も実践を重ね、研究を深め、児童にとっても教師にとってもさらに意義のある「学習評価の共有」を目指していきたい。

【資料1】中教審報告

(3) 評価の方針等の児童生徒との共有について

○ これまで、評価規準や評価方法等の評価の方針等について、必ずしも教師が十分に児童生徒等に伝えていない場合があることが指摘されている。しかしながら、どのような方針によって評価を行うのかを事前に示し、共有しておくことは、評価の妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージをもたせる観点からも不可欠であるとともに児童生徒に自らの学習の見通しをもたせ自己の学習の調整を図るきっかけとなることも期待される。

また、児童生徒に評価の結果をフィードバックする際にも、どのような方針によって評価したのかを改めて共有することも重要である。

※下線は関屋小学校

(平成31年1月21日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」より)

【資料3】学習指導案……本時だけでなく単元の評価規準、ルーブリックも明示している。

第6学年 算数科学習指導案

1 単元名 比とその利用

2 単元の目標

- (1) 比の意味や表し方を理解し、数量の関係を比で表したり、等しい比をつくったりすることができる。
- (2) 日常の事象における数量の関係に着目し、図や式などを用いて日常生活に生かす。

3 単元の評価規準とルーブリック

評価観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	比の意味や表し方を理解し、数量の関係を比で表したり、等しい比をつくったりすることができる。	日常の事象における数量の関係に着目し、図や式などを用いて数量の関係の比べ方を考察し、それを日常生活に生かしている。	二つの数量の関係について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。
判断基準	レベル3 比の意味や表し方、比の値について理解し、数量の関係を比で表したり、等しい比をつくったりすることが十分できる。	数量の関係に着目し、複数の方法で図や式などを用いて数量の関係の比べ方を考察している。	二つの数量の関係について、比で表したり、等しい比や比の値を求めたりする際に、多面的に捉え検討したり、比を生活や学習に活用したりしようとしている。
	レベル2 比の意味や表し方、比の値について理解し、数量の関係を比で表したり、等しい比をつくったりすることができる。	数量の関係に着目し、図や式などを用いて数量の関係の比べ方を考察している。	二つの数量の関係について、比で表したり、等しい比や比の値を求めたりする際に、よりよいものを求めて粘り強く考えようとしている。
	レベル1 比の意味や表し方、比の値について理解することができる。	数量の関係に着目し、比べ方を考察している。	二つの数量関係について、比で表したり、比や比の値を求めたりしようとしている。

【資料2】模擬授業形式の指導案検討



指導案検討は模擬授業形式で行い、タブレット端末の操作なども、実際の授業と同じように行う。疑問点や改善点があれば、途中でストップをかけて改善案などについて意見交換を行う。

【資料4】単元用ルーブリックカード

	学習内容とまとめ	知識	考える	自分から
1	割合の表し方を思い出す。	割合の表し方が分かった	考える	1つの場面について考えた
2	2つの量の割合を、比を使って表す。	比を比の表し方が分かった	考える	1つの場面について考えた
3	等しい比について分かる	等しい比の値について分かった	等しい比の求め方を1つ考えた	1問以外はチャレンジした
4	等しい比の性質を使って求める	練習問題で2・3問できた	考える	1問以外はチャレンジした
5	小数や分数の比を簡単にしよう	1つは友達に説明できた	考える	1回は友達と交流した
6	比を利用①等しい比の性質を活用して考えよう	練習問題で2問できた	図や式を使って考え方を考えた	1問以外はチャレンジした
7	比を利用②比で分けて考えよう	1つは友達に説明できた	1つは友達に説明できた	1回は友達と交流した
8	学習のまとめをしよう	算数の方の問題が2回で合格	考える	自分の方でチャレンジした
9	テスト 右には、これまでの合計点を書こう。		/18	/12 /15

単元の振り返り(分かったこと、みつけたきまり、どんなことに生かせようか など)

【資料5】授業研究公開授業における本時ルーブリック (R3.7~R4.10)

	本時のねらい (本時 /)	資質能力	ルーブリック (判断基準)		
			レベル3	レベル2	レベル1
1年 生活 「あさがおともだち」	あさがおに親しみを持ち、大切にすることについて、夏休みの世話やあさがおの開花の様子をグループで見合うことを通して、開花の喜びや世話の頑張りを共有し、もっとあさがおと友達になる方法を考え、世話のめあてをもつことができる。(5/8)	主体的	あさがおとても友達になっていて、あさがおの様子に合った世話を続けている。	あさがおと友達になっていて、あさがおの様子に合った世話をしている。	あさがおと友達になっていない、世話をあまりしない。
1年 国語 「ともだちのこと、しらせよう」	友達が一番楽しいことを紹介することについて、2つのインタビュー映像の比較から、詳しく質問するにはどうしたらよいかを考えることを通して、友達にどんな、どうして、いつなどを使って質問をすることができる。(3/6)	思・判・表	ペアの友達に2つより多く、詳しく質問をすることができる。	ペアの友達に1つ、詳しく質問をすることができる。	ペアの友達に1つも詳しく質問をすることができない。
1年 音楽 「がっきとなかよくなろう」	タンブリンの音色について、お題に合った音色に近づくように鳴らし方を試したり、友達の考えた音を聴いたりすることで、お気に入りの音色を考えることができる。(3/6)	思・判・表 主体的	お題の音が出せるように、強さ・速さ・長さのうちの2つが工夫できた。	お題の音が出せるように、強さ・速さ・長さのうちの1つが工夫できた。	お題の音を工夫することは難しかったが、お題の音を作れた。
2年 国語 「そうだんにのってください」	お悩み相談会で話しを進めることについて、グループ内で練習したり録音した自分たちの話し合いの様子を聞いたりする活動を通して、こつをつかみ3分間の話し合いをすることができる。(5/8)	思・判・表	質問をしてから、アドバイスや自分の考えを話すことができた。	質問をすることができた。または、友達の質問を聞いて、アドバイスや自分の考えを話すことができた。	質問やアドバイスはできなかったけれど、うなずきながら話をきくことができた。
2年 図画工作 「ふしぎなたまご」	たまごから生まれてきたものについて、ロイノートで自分たちの制作過程を紹介して、互いの作品について質問し合うことで、完成に向けて発想を広げることができる。(4/7)	思・判・表 主体的	友達の質問に答えて、自分で判断し、絵に足したいことが決まった。	友達の質問に答えて、新しいアイデアが生まれた。	友達の質問への答えを考えた。
3年 国語(書写) 「おれとはね」	「折れ」と「はね」の筆使いを理解して書くことができる。(1/3)	知識・技能	レベル2①②のどちらもできている。	①「折れ」横画から一度止めて、筆を回さずに書くことができている。②「はね」力を抜きながら、左上へ書くことができている。①が②できている。	横画・縦画について、穂先の向きに気を付けて筆をトンと置いてから書き始めていない。書き終わりを止めていない。
3年 算数 「筆算のしかたを考えよう」 (1けたをかけるかけ算)	繰り上がりのある(3位数)×(1位数)のかけ算の筆算について、位ごとに筆算やその仕方をカードにまとめたり、説明したりする活動を通して、繰り上がりの処理に気を付けて、正しく計算することができる。(6/9)	知識・技能 思维的 判・表	くり上がりに気を付けて、練習問題が全部できた。	くり上がりに気を付けて、練習問題が半分以上できた。	間違えてしまったけれど、練習問題を筆算でといた。
4年 算数 「面積～算数の刃 面積列準備～」	複合図形の面積を求めることについて、これまでに学習した内容を確認することを通して、長方形を見付けられよいくに気付き、必要な辺の長さを調べ、求め方を説明することができる。(6/10)	思・判・表	面積の求め方を、2つ以上の方法で、考えを書いたり、説明したりすることができる。	面積の求め方を1つの方法で書いたり、説明したりすることができる。	友達の考えを聞いて、面積の求め方が分かる。
4年 国語 「中心となる語や文を見付け要約し、調べたことを書こう」	「世界にほころ和紙」の「中」について、和紙のよさや魅力を伝えるために必要な理由や事例を友達と話し合ったり、書いた文章を読み合ったりする活動を通して、和紙のよさや魅力を伝える理由や事例を文章に書き表すことができる。(9/16)	思・判・表 主体的	和紙のよさや魅力が伝わるように理由や事例を使って書くことができた。(2つとも)	和紙のよさや魅力が伝わるように理由や事例を使って書くことができた。(どちらか1つ)	和紙のよさや魅力を伝えるために必要な言葉や文を考えることができた。
5年 国語 「事実と感想、意見を区別して、説得力のある提案をしよう」	提案スピーチのリハーサルについて、スピーチモデルの話のよさについて話し合ったり、互いのスピーチを聞き合ったりする活動を通して、事実と感想、意見を区別した説得力のある提案スピーチを考えることができる。(5/6)	思・判・表	事実と感想、意見の違いを明確にして、分かりやすくスピーチをしている。	事実と感想、意見の違いを明確にして、スピーチをしている。	事実と感想、意見の違いを明確にして、スピーチが分かった。
6年 体育 「6年間の成果を発表しよう～マツ編～」	補助倒立回転について、解決のための方法や活動の場を選択したり、撮影した動画から自他の課題を把握したりすることを通して、壁のぼり倒立からの前転をすることができる。(3/8)	知識・技能	壁のぼり倒立から、あごを引いて背中の方に倒れ込み、安全に壁のぼり倒立からの前転ができる。	壁のぼり倒立の姿勢から、補助をもらって、あごを引いて背中の方へ倒れ込み、前転ができる。	補助をもらって、ろく木や手押し車から倒立前転をしている。
6年 算数 「比とその利用」	校舎の高さを求めることについて、同時刻の高さと影の長さの比が等しいことを知ることで、等しい比の性質を使って式を立てて求めることができる。(6/9)	知識・技能 思・判・表	練習問題で2問以上正しく求められた。	練習問題で1問正しく求められた。	練習問題に取り組んだが、正しい答えが出せなかった。
特別支援学級 生活単元 「サツマイモがとれたよ」	プレゼント用のサツマイモ袋を作ることについて、どんなイモの組み合わせにすればよいかの話し合い活動を通して、見当をつけながらちょうどよいイモの重さにするにはどうしたらよいか分かり、大体同じ重さになるように分けることができる。(7/9)	思・判・表	自分でできた(思・判・表)(知・技)ゆずり合って&進んではかった(主体的)	手伝ってもらってできた(思・判・表)(知・技)進んではかった(主体的)	やろうとした(思・判・表)(知・技)はかった(主体的)
特別支援学級 生活単元 「校外学習に行こう」	公共交通を使った交通手段について、友達と協力して、タブレットの検索機能や時刻表、地図などの必要な資料を使いながら、出発や到着時刻を調べたり、お金を計算したりすることができる。(5/17)	思・判・表	自分でできた(思・判・表)(知・技)協力し合って進んで活動した(主体的)	手伝ってもらってできた(思・判・表)(知・技)進んで活動した(主体的)	やろうとした(思・判・表)(知・技)活動した(主体的)

〈主要参考文献〉

- ・「「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き」(田中博之著 教育開発研究所)
- ・「実践事例でわかる! アクティブ・ラーニングの学習評価」(田中博之著 学陽書房)